インドの美容法

——叙事詩を中心として——

森 真理子

本稿の目的は、『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』などのヒンドゥー教の古典サンスクリット文献に見られる「美」及び「美容法」の諸相に関する基本的・原理的な考察であって、「美容法」の具体的な内実に及ぶものではない。美容〔法〕とは、一般的に「容貌・容姿・髪型を美しくすること」と規定される¹⁾が、そこに、装い一般(化粧²⁾、装飾品、衣服など)を含めて考える。また(1)に基づいて、「美」を「輝き」を持つものと捉え、「美容〔法〕」をその「〔外面的な〕輝きの増減〔技術〕」と捉えることからスタートしたい。

(1) 本質的に「美しい(sundara)」,あるいは「美しくない」というような何かがあるのだろうか? その者の為に輝く(rocate)ところのそのものこそが、その者にとっては、「美しい」ものだろう³⁾。(Hit II-46)

「会堂は、良き衣服を着た者(vastravat)によって征服される」(Mbh V-34-45)という文言があるように、「美」は、その輝きで人を魅了し征服する「力」と考えられるが、(2)が端的に示すように、女性などの「美」は、特定の個人(夫、愛人、神)を満足させることを至上の目的とする⁴⁾。「夫を満足させないような女は、妻の名に値しない」(Hit I-157)と言われるが、(3)では、「女性の輝き」が「出産」から一族の繁栄までの原因であるとまで敷衍される。

(2) シーターよ、[あなたの、]夫に対する恩愛は、これまで、十分に為された。か細い肢体を持つ女よ、恩恵を施すべし、あなたへの美容/化粧(parikarman)が為されるべし。

〈8〉美しい臀部を持つ女よ、[あなたは、]高価な装飾品(ābharāṇa)と衣服(ambara)を帯びて、わたしを、愛すべし。美しい顔を持つ女よ、[あなたは、]わたしの、すべての女たちのうちの最高の者となるべし。〈9〉(Mbh III-265-8～9)

(3) いやしくも、もし、女が輝か(roceta)なければ、[彼女は]男を悦ばせることはない。男が悦ばなければ、懐妊が起こることはない。〈61〉しかるに、女が輝いている(rocamāna)時には、その一族は、一切輝く(rocate)。しかるに、その[女]が、輝かない(arocamāna)ならば、[その一族の]まさしく一切は、輝かない(na rocate)⁵⁾。〈62〉(Ms III-61～62)

インドにあっては、美容／輝きの増」が、「浄化／汚れの洗浄（マイナス的要素の除去）」と「荘厳（プラス的要素の付加）」の二つの面で捉えられていることが確認出来る。「肢体は水によって浄化される」（Ms V-109）や「洗浄によって、美貌は護られる」（Mbh V-34-37）と言われる、「身に帯びた汚れの除去によって輝く」例⁶⁾が散見する一方、以下の（4）に見る通り、「荘厳によってたちどころに輝く」との用例は随所に見られる。

（4）森に出立せんとして、その高貴なヴィデーハの姫 [=シーター] は、高貴な [自らの] 肢体を、その色とりどりの宝飾品 (vibhūṣaṇa) で荘厳した (bhūṣayāmāsa)。〈17〉美しく装った (suvibhūṣita) ヴィデーハの娘は、その宮殿を、輝かせた (vyarājayata)。あたかも、光輝に満ちた昇りつつある太陽の光が、一時に、空を [輝かせる] ように、〈18〉 (R II-34-17 ~ 18)

「インドの美容法」を考える際に看過し得ないのは、「身体と精神」との二元論に対応する、外見：外的な美と内面：内的美德の問題、及び「美容」が直接的に関わる女性の「弱さ」と「悪性情・本性」の問題⁷⁾である。

インドの場合、外見よりも内面が重視された結果、「装い」を人間の内面／心に基づく意志的な営みと考えると、「輝きを失うこと」という〈負の装い〉という視点が導き出される。美容は「輝きを増すこと」と捉えられ、それが尊重される反面、「輝きを失うこと」いわば〈負の装い〉が選取りられる場合もあることを意味する。弱い存在である女性は、保護者が不在の時は、「花や化粧 (varṇaka) を避け」(Mbh III-222-29)、〈負の装い〉、輝きを押さえることで護られる⁸⁾。さらに、「女性は、悪しき衣服⁹⁾によって、護られるべき」(Mbh V-34-38)とも明言されている。保護者のいない女性は、輝いてはいけないう、目立たないようにしていることが求められ、にも拘わらず、以下の（5）からは、そうした〈負の装い〉をもってしても女性は護られず、基本的に女性を護ることが出来るのは、内面の美德をおいてはないと考えられていることが窺われる。

（5）家も、衣服 (vastra) も、墨壁も、避難所であるということはない。そのような王への敬意も [またそうであるということ] はない。徳行 [だけ] が、女を護るものである。〈26〉 (R VI-102-26)

（6）に見る通り、外面の輝きは色褪せてしまう¹⁰⁾。輝いていた「頭髮も、油がなくなったならば、輝きを失う」(Pt I-82: p. 13) という〈負の装い〉の場合を含めて、「老いは美貌を奪う」(Mbh V-35-43) や「苦悩のせいで美貌が損なわれる」(Mbh V-36-42) と描写される。

(6) 暑くまた寒い [森での生活の] 年月が、化粧 (āṅga-rāga) を常とし、赤梅檀 (raktacandana) を使用してきたシーターを、たちどころに色あせ (vivarnatā) させることでしょう。〈9〉 (R II-30-9)

インド古典にあつては、「見目美しい」との結婚相手の女性の条件¹¹⁾を含めて、内的な資質や能力こそが問われるべきはずの占星術師¹²⁾や使者¹³⁾や法廷 (sabha) に立つべき証人¹⁴⁾などについても外見に関わる条件がしっかりと盛り込まれているのが散見する。これは、「概して美德や欠点は、身体の形相に随順する」(Bs II (1))との観察に基づくものであり、時に「女は、外的作用によっては、魅惑的であるが、内面は毒から出来ている」(Pt IV-87: p. 27)と腐されることがあるものの、「外見は内面を映し出す鏡である」の類の、(7)が世間一般の見方である。

(7) 外見、身振り、歩き方、行動、そして言葉によって、また目・口の変化によって、内なる心が見てとられる。〈44〉 (Pt I-44: p. 9)

〈正の装い〉すなわち「美容」によって、どうして「輝きの増」があるかという、いわば「美容の理論」もインド古典に散見する。果たして論理的整合的な理論になっているかはともかくとして、それ自体決して美しくない、むしろ「汚れ」とも言うべき「眉墨、顔料 (añjana)」を付けることによる「輝きの増」の理論¹⁵⁾、あるいは、「夫は女にとって最高の飾りである」との格言の理屈¹⁶⁾等が示されるが、(8)には、宝飾品の代表「宝石」の場合の用例を引く。ここには、荘厳するものと通常考えられている「宝石」に関して逆説的とまで言える理論が繰り広げられているのを見る。冒頭の(1)に反して、「かりに、本質的に美しいものや、美しくないものがあつたとしても、美容法のいかんによっては、すなわち、うまく装うことを怠るならば、輝かない」といった、美容法の具体に関する、かなり本質的な主張と見ることも可能である。

(8) 女性たちが、宝石を輝かしめる (vibhūṣayanti) のであり、女性たちが、宝石の輝きによって、荘厳される (bhūṣyante) のではない。女性たちは、宝石を帯びることなしに [も]、心を魅了するのであり、宝石は、女性の肢体と結びつくことが無かつたならば、[心を魅了することは] ない。〈2〉 (Bs LXXIII-2)

インド古典にあつても、美容が女性だけのものではないことを確認した上で¹⁷⁾本稿を結びたい。満足させるべき相手を、単なる世俗的なものではなく、天的な神々をも包摂したものと考えた時に、初めて「インドの美容法」を十全に語る地平に立てるであろう。

【略号】 Bs:Brhatsaṃhitā (SBGM, 97); Hit:Hitopadeśa (PetersonEd); KMs:Kullūka's Comm. ad Ms; Mbh:Mahābhārata (PoonaCrEd); Ms:Manusmṛti (J. L. ShastriEd); Pt:Pañcatantra (Kielhorn&BühlerEd); R:Rāmāyana (BarodaCrEd); 金倉圓照・北川秀則 [1968]:『ヒトパーデーシャ』(岩波書店); 原実 [2002-05]:「古代インドの女性観」(1)～(4)『国際仏教学大学院大研究紀要』第5号～第9号; 松山俊太郎 [1980-]:「古代インド人のよそおい」『化粧文化』No.3～

【註】1) 『広辞苑第五版』。紙面の関係から、参考文献・註記は最小限に留めた。2) 「美容」のうち、特に「莊嚴」の代表的なものである「化粧」に相当するサンスクリットの原語として、本研究では *aṅga-rāga*, *parikarman*, *varṇaka* 等を抽出し得た。なお、本研究では一切触れられない「化粧法」の内実に関しては、松山 [1980-] が圧倒的である。3) 「絶対的な美」を否定しているような用例である。A [nom] B[dat] *rocate* は通常、「AはBにとって好ましい」のように翻訳される。金倉・北川 [1968] 98-99 頁等。4) Mbh III-223-12; III-261-19～20; R VI-102-7～14, etc. 5) 註釈では「輝きを生じるもの」として「衣服 (*vastra*)」と「装飾品 (*ābharāṇa*)」が明記される (KMs III-61: p. 91)。6) Mbh V-34-37, etc. 7) 「女性の悪しき性情」については、Mbh XIII-38, etc. でしばしば論じられるが、ここでは触れない。「インドの女性」に関してはこれまでも既に多岐に亘って様々に研究されている。近年のものでは原 [2002-05] が有益であった。8) Mbh III-264-42; -265-1; -266-58; -275-9, etc. 9) 絹衣 (*kaūṣeya*) に対する樹皮衣 (*cīra*)。R II-33-9, etc. 10) Mbh III-264-50, etc. 11) Ms III-8～10; Pt IV-71: p. 23, etc. 12) Bs II (1): p. 19, etc. 13) Pt III-88: p. 54, etc. 14) Pt I-197～200: pp. 35-36, etc. 15) Hit II-144: p. 81, etc. 16) Hit III-27: p. 97, etc. 17) Ms IV-34～35, etc.

〈キーワード〉 美, 美容, 化粧, 身体論, 女性, 叙事詩

(駒澤大学大学院研究生)

These Recensions of this legend have many differences in details, but agree on the next point; Gotama Buddha stayed in Rājagaha with the aim of spending the rainy season there. From the context one can suppose, that, because Gotama Buddha refused to spend the rains retreat in Rājagaha and went to Vesālī, he should have spent the rainy season there. Nonetheless no recension mentions it.

The *Commentary* to the *Aṅguttaranikāya* and other later commentarial works give us the locations of Gotama Buddha's rains retreats in the form of a list. According to it, the city Vesālī is where the Gotama Buddha spent his fifth rains retreat. Did the commentators intend that the event told in this legend occurred in the fifth year? The writer inquires into the appropriateness of this hypothesis in this paper.

53. The Goddess Durgā in the *Kālikā-purāṇa*: with special reference to Ma-hiṣāsūramardinī

MAEDA Chisato

The goddess Durgā, wife of Śiva, is one of the most important and impressive goddess of the Hindu pantheon. The goddess is worshipped in her various shapes. Her most popular epithet is Maḥiṣāsūramardinī, the slayer of Maḥiṣa who is a buffalo demon, and she is represented in pictures as defeating the demon Maḥiṣa. The story of Maḥiṣāsūramardinī is the most popular and important one regarding Durgā. The *Devīmāhātmya* is one of the famous scriptures which tell her story. In the *Kālikā-purāṇa* the story of Maḥiṣāsūramardinī is found in chapters 59 and 60. This study attempts to clarify the particularities of her as defeating the demon Maḥiṣa in the text.

54. A Note on the Beauty and Beauty Art in Hindu Epic Literature

MORI Mariko

In this paper we inquire into the *beauty* and *beauty art* in Hindu epic literature, such as *Mahābhārata*, *Rāmāyaṇa* and so on. This is just a preliminary theoretical study on the theme and so the details of beauty art (makeup, ornaments, dress & etc.) which have been so far occasionally examined are not

dealt with by us.

We take *beauty* as luster of appearance and define *beauty art* as a technique for the increase and decrease of luster. We go on to examine the various aspects of *beauty* and *beauty art*, considering such various view-points as [1] *beauty* is alluring power, [2] the relation between appearance and inner qualities, [3] two types of beautification: by removal of stains and by equipment of shining elements, [4] bad nature of frail women. Especially view-point [1] is related to the religious relation between men and gods in India. In the same way, [2] corresponds to the duality of body and soul which is very important for understanding Indian culture.

55. *Virahabhakti* in the *Bhāgavatapurāṇa*

NAKANO Sayaka

Hardy defined *virahabhakti* as ‘devotion in which the sentiment of “separation” is cultivated.’ According to the *Bhāgavatapurāṇa* (BhP) which tells the truth that everything in the world consists in the transcendent God Kṛṣṇa, the separation described as that of Gopīs, the typical devotees of Kṛṣṇa, from Him cannot but mean that the Gopīs, who are ignorant of the truth, cannot see Kṛṣṇa as an incarnation.

In the present paper, focusing on the verses of BhP X. 29–33 in which the word *viraha* occurs, I have attempted to make clear the characteristics of *virahabhakti* in this text.

According to BhP, when the Gopīs are conscious that they are separated from Him, they experience the pain of separation from the loved one. But this text emphasizes that the state of being separated from Him opens the way for their experiencing the joy of the union with Him and attaining Him. It is interesting that the pain and the joy are said to eliminate the effects of bad deeds and those of good deeds, respectively. It may be said that BhP, describing a world of duality, Kṛṣṇa and his devotees, gives *virahabhakti* the character of being the source of supreme joy.